長編詩「夕焼けに帰り、夕焼けに行く」について

長編詩「夕焼けに帰り、夕焼けに行く（原題：노을에 와서 노을에 가다）」は、ある元日本軍「慰安婦」のハルモニが年老いてからようやく故郷に帰り夕焼けの中両親の墓参りをする場面に始まり、名乗り出ることもできないまま死んだ仲間や今も隠れ暮している当時の仲間を探しに夕焼けの中に出て行く場面で終わります。

この長編詩は 1991 年に日本軍「慰安婦」として最初に名乗り出た金学順ハルモニの証言を基に構成されたもので、一人芝居「노을에 와서 노을에 가다」（夕焼けに帰り、夕焼けに行く）として、1995 年秋に韓国ソウル市で上演されています（演出：ホン・ミヌ）。この演劇は、朝鮮の伝統芸能であるパンソリの調べと舞で構成され、金学順ハルモニが舞台に立ち、自らの経験を、日本帝国主義の蛮行を、語られたということです。

長編詩「夕焼けに帰り、夕焼けに行く」を紹介してくださった李壽甲さん（写真下）は 1925 年生まれ、今年満 88 歳になられた韓国人男性です。日帝時代、日本軍のトラックを運転していたとき「工場に働きに行く」と信じて運んだ朝鮮の女性たちが日本軍「慰安婦」にされたことを後に知り、挺身隊問題対策協議会（挺対協）活動の一翼を担われました。そして以降 20 年以上の間、韓国と日本を往復しながら、日本のアジア侵略・植民地支配に対する戦後補償運動と今日の日米韓軍事同盟に反対する反戦平和運動、日韓民衆・アジア民衆間の連帯運動の発展のために心血を注いでこられました。日本各地で開催された反戦平和集会や米領事館前の抗議行動などにも数多く参加され、烈々と日本帝国主義・米帝国主義を糾弾する李壽甲さんの講演を聴く機会のあった人も多いことでしょう。

李壽甲さんは、挺対協の指導委員として活動していた時分から手元に長く保管していたこの長編詩を、2011 年初夏から秋にかけて 10 数回に分けて自らリタイプし訳者に送ってくださいました。「方言で書かれていて難しいだろうが韓国語の勉強に役立てよ」と暑い夏の盛りに送ってくださる原稿には、「この詩を送る人もランニングシャツの袖に涙を拭いつつ」という添え書きがあり、秋の気配が近づく最終回近くには「実感を深くすればするほど目頭が濡れるので、今日はここまでにして数日後に完結させます」とありました。

金学順ハルモニが名乗り出てから 20 年を経て、日本軍「慰安婦」の強制性を否定する動きが再び強まり、若い世代に日本軍「慰安婦」の真実を伝えることが重要になっている今、「日本で上演できれば」という思いを込めて送ってくださったこの長編詩を、李壽甲さんの手紙とともにご紹介します。

（訳者　永谷ゆき子）

李壽甲さんからの手紙

（前略）

この作品は、私が挺対協の指導委員として活動していたころに、演劇を通じて日本帝国主義の蛮行を糾弾し、ハルモニたちの恨（ハン）を解くために編集されたものです。可能なら日本社会で上演することができればと願っています。演劇は1人が弁士になって熱弁をふるって実感をこめて演じてみればどうだろうかと進言いたします。

『わたしが欲しいのはお金じゃない！わたしたちの体と魂を返せと言ってるんだよ！』

これは、当時、強制的に連行されて従軍慰安婦になった20万人以上の朝鮮女性（12－25歳）の恨（ハン）のこもった絶叫である。私たちの祖母や母が日本軍の性の汚物処理場として性奴隷として、青春を踏みにじられた。日本軍が敗北するやいなや防空壕に入れられたまま生き埋めにされ、大量虐殺され、かろうじて生き残った数少ない女性たちまで、異国で、あるいは朝鮮半島内でさえ、なんの罪も無いのに自分の故郷に帰ることもできず、山の中に埋められ残酷な人生に声も無く死んでいった。解放から半世紀が過ぎたけれど、「天皇の軍隊」という神聖な（？）名のもとにあらゆる蛮行を犯し、「天皇の軍隊」の軍靴が通り過ぎた場所は殺戮と略奪と強姦だけが乱舞する「野獣の軍隊」であったにもかかわらず、いまだに彼らは懺悔するどころか国際社会で臆面も無い顔をして自分たちを合理化している。

いっそう残念なことは日本の植民地としてずたずたに引き裂かれた恥辱の歳月を忘れ去り、現在も日本文化の植民化がなされているという事実だ。挺身隊とは、ある目的のために自ら進んで身を捧げる部隊だ。ところが連行された朝鮮女性のいったい誰が自ら進んで身を捧げただろうか？したがって挺身隊は日本軍が付けた名前であり、事実は「強制徴集された日本軍慰安婦」といわねば事実と合わないだろう。（中略）　挺身隊ハルモニという理由だけで、最近まで隠れて暮らし、1991年に世界で最初に日帝「従軍慰安婦」を暴露した朝鮮の偉大な女性金学順ハルモニが、日本人に対して「おまえたちは歴史もない国だ。どうしてあんなひどい出来事を教科書に載せないのだ！」と叱責されたが、韓国の歴史教科書からも抜け落ちていることを知って胸を叩いて嘆かれた。

1991年挺身隊問題対策協議会の指導委員として活動しながら、ハルモニたちの惨酷な苦痛をいっそう深く知ることになり、その時から日本軍「慰安婦」問題を解決するために、日本の下関裁判など韓日で運動をしながら、「夕焼けに帰り、夕焼けに行く」という物語を知り今まで保管してきました。朝鮮の文化による非常に難解な文章であるうえに方言が多いので、正しく理解するのが困難だろうと思われますが、朝鮮の女性たちのこうむった苦痛に思いを馳せれば、朝鮮の女性たちの苦痛は人類の歴史から消すことができないものであることを改めて実感させられます。

李　壽　甲

夕焼けに帰り、夕焼けに行く

紹介：李壽甲（イ・スガプ）　翻訳：永谷ゆき子

次の言葉は、初めて『挺身隊の実像』を暴露された金学順ハルモニが、証言台に立ち涙で訴えられたその証言の一部である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

韓国の若者たちは、いくら過去のことだといっても、あの出来事を何故こんなに知らないのか。わたしが老いた身でこのように出てくるのは、わたし１人のためじゃない。いくらかの補償金をもらうためなんかではもちろんない！　死ぬ前に、死ぬ前に、かならずこの事実を知らせて、今の若い人たちに二度とこんな惨たらしい目に遭わないよう、しっかりしろといっているんだよ。

ー沈黙ー　　（ため息をつきながら諦めたような声で）

毎日話したって、分かっているのかいないのか。

分からないだろうな（沈黙）。ここに集まった皆さんは、１人が10人にこの話を伝えてください。…こんなことがあってはいけないと…わが民族を、わが民族を大切に思わなければいけないと…

（泣き出しそうになりながら、とても強く）なんであんなことを？なんであんなことを？

今も日本の戦後責任において過失はなかったと主張する日本人たちが憎くてならない。

慰安婦
誰が歴史のぬかるみの中から
血と膿にまみれたあなたたちの名前を探すだろうか
無名のあなたたち、光も見えない植民地の民の悲しみ
全身で、全身で受け止めてきたのだもの

おそろしいジャングルの中、ぬかるみのなか
弾丸の降る中をくぐりながら
あなたたちは時には弾薬を運び
あなたたちは時には負傷兵の臨時看護婦
あなたたちは一日に数十人の日本のやつらの
鋭い性器の穂先に刺され
下半身が血と膿に癒えることもなく
結局、性病で、マラリアで
木切れのようにバタバタと倒れていったよ

真っ暗な地下防空壕のなかに閉じ込められ
誰があなたがたを無残にふみにじったのか
胸のなかに血のにじんだ恨を抱え
誰があなたがたの胸に自決の匕首を突き立てさせたのか
あなたがたの傷ついた子宮、民族の子宮
壮絶なあなたがたの名前
慰・安・婦
踏みにじられた民族の母よ

植民地支配のもと　貧困に身を震わせていた
慰安婦の幼い娘たち
大韓の娘たち
今日ふたたび命ほど大切な身を売るか

（夕焼け
片手には一握りの野の花
もう片方の手には酒と鎌を包んだ風呂敷包みを提げ
盛り土が崩れた二つの墓の前に来て、お供えをしてから
死者のまえにお辞儀を二回する
風雪の歳月が染み付いた痕跡が歴然たる顔）

母さん、来たよ　父さん、来たよ
14歳の幼い年で家を離れた私が
還暦も過ぎた今やっと帰ってきました
薄情だと言わないで、無情だと言わないで
遅れてここにやってきたのは
自分のせいばかりではありません
心が帰りたがると
私のからだが付いてこない
---私のからだが帰りたがると
私のこころが付いてこなかった
隠れ暮らした歳月はあんなに長かったけれど
私のかあさん、とうさんは　生涯を貧しく生きて
ここに寂しく土の墓のなかに埋められ
わたしも母さん父さんの年になったんだなぁ

（墓の周りを回りながら、雑草をむしり）

こんなにも草が生い茂り

／果てもない歴史の泥沼のなか
／傷と抑圧と消耗
／罪悪と死
／差別と恨だけが
／あなたがたの名前だと

／羞恥と苦痛
／痛みと涙だけが
／あなたがたの宿命だと
／誰がいうのか
／慰・安・婦
／踏みにじられた民族の母よ

こんなにも盛り土が崩れて
訪れる人もない寂しい山河に
母さん、父さんは私を待ちながら
からだを横たえていたのですか
わたしがふるさとに帰って来た今日も
夕焼けが無情に染めているね

（呆然と夕焼けを眺めながら）

村の入り口の道端にしゃがみこんで
地を叩いて慟哭されていた父と母を
覚えているか
夕焼けよ
お前は覚えているか
野の花のようだった14歳の
お下げ髪のわたしを
チョゴリの結び紐をひきちぎられながらも
行かない、行きたくないと
身もだえしていたわたしを
黒いゴム靴が脱げて
足袋はだしで　足袋はだしで
ずるずると引きずられていったわたしを覚えているか？

（墓を撫でながら）

わたしを追いかけてきて転び
わたしを追いかけてきて転び
自動車道にあたまを打ち付けていた母さんと父さん
お墓のなかに横たわって
もう私が誰だかも分からない母さんと父さん
わたし、帰って来たよ わたしが帰って来たよ あなたの娘が来たよ
わたしももうすぐ死ぬ年になって、ようやく帰って来たよ
夕焼けは、昔も今も
山河を赤く染めているけれど
花咲く私の青春は、すでに散ってしまった
ふたたび花咲く日は絶対に来ない

（ふと、風呂敷包みを解いて鎌を持ちあげ
目の前にあてて昔を回想しつつ）

思い出す　思い出すよ
秋の刈り入れをしていたあの日
田んぼで母さん父さんが稲刈りをしていたあの日
父さん母さんは鎌で稲を刈りながら
こんなふうに歌ったよ

（田んぼで稲を刈る父母の声で、かわるがわる）

エヘヤディヤ　サンサディヤ
これこれ女房よ　おれの話を聞いてみろ
田んぼ一枚刈っては　小作料を払い
田んぼ一枚刈っては　供出に出す
田んぼ一枚刈っては　食料にしよう

エヘヤディヤ　サンサディヤ
これこれおまえさん、私の話も聞いておくれ
田んぼ一枚は　娘の嫁入り支度に
田んぼ一枚は　種籾を買う金に
田んぼ一枚は　うちの暮らしのために
急いで急いで刈り取りましょう

エヘヤディヤ　サンサディヤ
すっかり刈り取って　すっかり刈り取って
この田んぼ一枚をすっかり刈り取って
この田んぼ一枚を早く刈り取って
地主のやつらが、小作管理人のやつらが　来る前に
早く　早く　家に帰って
麦飯に　水をかけて食ったら
ふとんをかぶって　息子を作ろう
どんどん　刈り取ろう　どんどん刈り取ろう
憲兵　巡査が来ぬ前に
憲兵　巡査が来ぬ前に

（笛の音、あわただしく追われながら登場）

母さん、父さん　助けてください
日本の巡査が　日本の巡査が・・・

（恐怖に青ざめ　すくみ上がって　巡査に哀願しつつ）

ああ、お巡りさん　わたしはだめです
こんな幼い女の子　何をさせようと連れて行くんですか
離してください
わたしはまだご飯を炊いて、洗濯して、掃除することしかできません
こんな幼い女の子に　何をさせようと連れて行くんですか
こんな私に何もできやしません
お巡りさん、どうかわたしを捕まえないでください

（母を見ながら）

母さん　わたしを助けて

（父を見ながら）

父さん　父さん　助けてください

（母と父をかわるがわる見ながら）

母さん　父さん　わたし　行かない
あんな遠いところへ　幼い子どもになんで行けというの？

（ふたたび巡査に　哀願しながら）

お巡りさん、　わたしが行ってできることは何もないです
不器量な　できのわるい女の子を連れて行って　何をさせようというんです？
わたしが銃を撃てますか？　刀を使うことが出来ますか？
わたしが家を離れたら　年取ったうちの両親に　どうやって暮らせというんですか？
お巡りさん、助けてください　わたしを助けてください　どうか　どうか　わたしを

（どこかに連行されたあと、道端に残っている一本の鎌と脱げた黒いゴム靴一足
夕焼けが赤く染まって　やがて夜が来る
日が昇れば　日本軍駐屯地の兵営の中の慰安所
恐怖にすくんだ顔で　いっしょに連行されてきた　女たちに
低い声で話しかけるが　みな黙っている）

そこの年上のお姉さん　どこから来られましたか？
この幼い妹は　どこから来たの？
あの髪を結ったおばさんは　どうして連行されてきたのですか？
そこのチョゴリの紐がちぎれたお姉さん　誰がそんなことを？
そちらの顔にあざができたお姉さん、誰にされたんですか？

そこの姉さんは　なんでそんなにひどい怪我をしているの？
あなたは、あなたは、あなたは、　　あなたは？

（突然の空襲警報のサイレンの音、爆撃の音が過ぎてゆき
遠くから日本の軍歌がじょじょに近くに聞こえてくる
ふたたび夕焼け、はためく日章旗）

（軍靴の音、戸を押し開く音
ごろりと横になり、チマを脱げばモンペ姿
日本軍兵士を迎えながら）

あれ、なんでそんなことをするんですか
だめです　だめ・・・母さん、あっ！

（ふたたび軍靴の音、戸を開ける音、
ごろりと仰向けに寝て　日本軍兵士を迎えながら）

だめです・・・
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ　オナジネ
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ　オナジネ
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ　オナジネ
テンノヘイカ　オナジネ　テンノヘイカ
・・・・オナジネ・・・ニッポンジン
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ
テンノヘイカ

（ようやく着物の裾をかき寄せて　力なく起き上がって座り
仮面を脱ぐと　衝撃的な年老いた顔、現在の顔で）

母さん父さん
朝鮮の地に生れ落ちたこと
朝鮮の娘として生まれたこと
朝鮮の娘として生まれたこと
それが何の罪だから
こんな目に遭うの？
可哀相な、哀れなわたしの身の上
わたしの運命がどうして
日本のやつらのおもちゃになってしまったのか
わたしの体まで奪って

あまりに辛くてたまらない

（ふたたび軍靴の音、戸を押し開ける音
仰向けに寝て　日本軍兵士を迎えながら）

ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ　オナジネ
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ　オナジネ
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ
・・・・テンノヘイカ　オナジネ　・・・・テンノヘイカ
・・・・オナジネ・・・ニッポンジン
ニッポンジン　チョセンジン　テンノヘイカ
テンノヘイカ・・・・

（着物の裾を合わせて力なく起き上がって座り）

わたしの親がわたしを産んだとき
こんなふうに生きろとわたしを産んだのか
血肉を分けて　わたしを産んでくれたときは
一生　ゆたかに暮らせと　生んでくれたものを
こんなにも　血の涙で　生きるのか
わたしの親が　わたしを産んだとき
このように生きろと　わたしを産んだのか
十月十日のあいだ　おなかの中でわたしを育て
一生　幸せに暮らせと　生んでくれたのに
よい世の中で生きるどころか
この――――　慰安所で　日本軍のおもちゃになれと
わたしを産んでくれたのか

（ふたたび聞こえてくる日本の軍歌、軍靴の音、戸を開ける音、
チョゴリの紐を結びながら胸をかき抱き、向こうを向いて座りながら）

もし　兵隊さん　こんなことやめてください　やめてください
兵隊さんもうちに帰れば　姉さんや妹がいるでしょうに
どうしてこんなことをするんですか？
半日に相手をした兵隊さんが　40人、50人です
このわたしの四肢が　節々が　骨の一本一本が朽ち崩れて
もし　兵隊さん　やめて　やめてください
ひと月に相手をした兵隊さんが　千人、二千人です

（ふたたび聞こえてくる日本の軍歌、そして軍靴の音、
戸を開ける音、チョゴリの紐を結びなおし　胸をかき抱き
こちらに向いて座り　哀願して）

やめて　こんなことしないで　チョセンジンだからって　こんなひどいこと
わたしの胸が、からだが　つぶれ　砕け　こなごなになり
いまは　落ち葉よりもまだ劣る身の上です
兵隊さんの体も　わたしの体も　皆同じ　人間の体なのに
どうしてこんなに　私を踏みにじるの？
兵隊さんは　楽しいですか？　わたしは　はらわたがちぎれます
兵隊さんは　楽しいですか？　わたしは　はらわたがちぎれます

（ふたたび聞こえてくる日本の軍歌、そして軍靴の音、
戸を開ける音、チョゴリの紐を結びなおし　胸をかき抱き
つっぷして泣いていて）

だめです　だめです　やめてください　だめです

（夜、真っ暗な闇の中で　両手をあわせて　哀願していて
足で蹴られて倒れながら）

ああっ

（倒れて　うつぶせたままで）

母さん父さん　　母さん父さん
会いたい　会いたい　母さん父さん　会いたい
小さい田んぼに　苗を植え　稲刈りをしていた　母さん父さん
霜が降りても　座ってわたしを待っていらっしゃるか
お日様も　月もない　遠い異国の　兵営で
わが身は　恥ずかしく　心は　壊れてしまったよ
母さん父さん、　案山子が倒れている　小さな田んぼで
わたしのことを悲しみながら　落穂を拾っていらっしゃるか？
一年中　袖口に　涙を　ぬぐっておられるか？
東の空を　眺め、また眺めては　祈り、また祈っておられますか？
母さん父さん
わたしは生きて帰ります
この身が　突かれ　砕けようと
わたしは　さいごまで　生き残り
母さん父さんのいる故郷の山と河に

母さん父さんを　訪ねていきます
会いたい　会いたい　母さん父さん　会いたい
わたしを恋しがる　母さん父さん
わたしは帰ります　生きて帰ります
きっと帰ります　きっと生きて帰ります

（ほおに　あふれて流れ落ちる　涙
遠くから　聞こえてくる　爆撃音、銃声
聞こえてくる　天皇の無条件降伏の放送の声
そこに続く　一節の民謡が終われば
釜山港の汽笛の音、着物を包んだ風呂敷包みを提げて
街角で　同僚たちといっしょに）

あんたはどこに帰るの？　行くところがないの？
行くとこがないの？
病気の身で　ふるさとに帰ることはできないって
あんたはどこに帰ろうと思ってるの？
帰るところがないの？
だめになったその身体では家に帰ることはできないって？
あんたはどこに帰るんだい？
尋ねていく人がいないんだって？
汚れた体では両親を訪ねていけないって？
この人はどこへ？
あの人はどこへ？
どこへ帰ろう、どこへ帰ろう
わたしは　どこへ帰ろうか？　どこへ

（着物を包んだ包みを敷いて座り、思いにふけり、空を仰ぎつつ）

母さん父さん、　何しているかなぁ？
生きているのかどうかもわからない
わたしが子どものころ
父さんは上手に歌を歌ってくれたっけ

（追憶にひたり寂しげな微笑を浮かべながら
立ち上がり　子どもをあやす父親の声で）

おお、いい子だ、いい子だ　私の娘よ
可愛い娘よ
金にも銀にも代えられない大事な子よ

親孝行な子よ、国に忠誠する子よ
金（きん）を払っても、お前を買えるものか
銀（ぎん）を払ったって、お前を買えはしない
よしよし　いい子だ
立派な田畑をもてたって、その嬉しさはお前のほうが上だ
瓦葺（かわらぶき）の家をもらっても、お前がいてくれたほうがうれしい
ああ、いい子だ　可愛いわたしの娘よ

（途中で歌いやめて、突然嗚咽して）

母さん、父さん

（雨音、雷、視線をあちこちさまよわせて）

わたしの悲しい身の上　あの天もわたしの心を知って可哀想だと泣いているのか？
ため息をついて　吹く風が物悲しい音を立ててむせび泣く
かなしく降る雨は　物寂しい雨音を立てるんだなぁ
空は低く、雲は濃いけれど
電信柱で鳴くあの鳥には巣がなくて
くねくねと流れるあの小川の水は留まるところがないから
ましてや人間は、誰がわたしを受け入れてくれるだろうか
帰れない、帰れない、このままでは帰れない
この女の身の上を見てください
父も呼べず、母も訪ねられない
日本のやつらに　踏みにじられた女が
いったいいつ家に帰るだろうか
帰れない、帰らない、わたしは帰らない
故郷の家の母さん父さん　恥ずかしくて　どの面さげてわたしが帰れるか？
人々が指差して　わたしを嗤う
それはみなこの一身に背負っていくとしても
くたくたになるまで働いて、必死に生きていけば
この苦痛、この痛みも　ぜんぶ忘れられるだろう

（夜の街、着物包みを抱えて）

何年経っても　わたしは流れ者の身の上
こっちに蹴られ、あっちに蹴られ、生活に蹴られて
体も心も　もうめちゃめちゃだ
どこに行こうか、どこに行こうか

（また別の夜の街、着物包みを抱えて座り
両腕でひざを抱えて）

ああ、辛いほんとに、もうほんとに耐えられない
寒いし、腹も減っているし
もうこれ以上歩けない
今からでも故郷に帰ろうか？
ぜったい分からないだろうよ、口を噤んでいれば
口を噤んで、歯を食いしばり、しゃべらなければ
ぜったいに分からないはず、ぜったいに分からないはずだ
ああ、だめだ、そんなことはできない
お棺の中に入るときまで　お棺の中の七星板に横たわるまで
言わなければ、喋らなければ、分からないだろう
いいや、だめだ、　この体でどうやって・・・
もう済んだこと、死んだと思えば　百回も死んだ命だから
飢えたら、飢えたままに生きて
眠たくなれば　他人の家のひさしの下で
オンドルの煙突でも抱いて　一眠りでもするさ（ほんとに眠れたら）

（最初の場面のあの夕焼け
二つのお墓の前に倒れて、むせび泣きながら）

行こうかな　行こうかな
両親のあとを追って行こうかな
針の山地獄にもついていき　西方浄土にも行ってみようか
山の獣も泣き叫び
野の獣も泣きに泣く
ヤマイヌ　ヤマネコ
手乗りの鷹に　　野生の鷹
カラスにカササギ　鳥たちも
みな泣き叫ぶ　あの世への道の峠に向かって
両親を追って行こうか
野原の草花は
この自然が厳しくても
一年に一回ずつ咲くというのに
私の両親のいる場所は
何がじゃまして
こんなにも辿り着けないのか
今からでも死んで
泣き叫ぶ魂になり

父母のいる墓の傍らに
呆然と泣いているうちに
夜中になれば父母に会って
悲しい話を聞いてもらいたい
この身を待って
私の両親はここに
埋められていらっしゃるのか

（鎌を取り上げて草刈をしながら、墓をなでさすり）

許してください、許してください
どうして私が母さん父さんを捨てることができようか
どうして私が母さん父さんを忘れて暮らすことができようか
私が帰りたくても村の人たちが私を覚えているかと怖くて
私の人生がひどく恥ずかしくて
父さん母さんの前に出られなかった
でも薄情だと思わないで　情無しだと思わないで
私の気持ちはひたすらに、いつでもどこでも
長すぎる夜に眠れないまま　母さん父さんを思う
寝ても覚めても　母さん父さんのことばかり
思いが尽きる日は一日もなかった
病んだ体、死ぬに死ねない命を握りしめ
死ぬ前に　母さん父さんに会いたくて
必死になって　ここまで　私　帰ってきました

（鎌を持ち、顔の前に持ってきて）

今は願いもない　恨もない
母さん父さんにもらった体を
健やかに守ることはできなかったけれど
お母さんの前に、お父さんの前に
帰れなかったわけをお話ししてからは
死んでも　生きられそうで
生きるなら　もっと強く生きられそうです

（ふと鎌を持ったまま立ち上がり客席に向かい）

もし、そこの善男善女のみなさん！
みなさんもあの時代に生まれていたなら
男たちは徴兵でひっぱられて死んだだろうし

女たちは　私の友人たちのように　死んだり
私みたいなざまになっていたでしょう
だからもう　どうかお願いです
挺身隊ハルモニ、挺身隊ハルモニと指差さないでください
挺身隊、挺身隊という言葉を聞いただけで
心が打ちひしがれ、五臓六腑が張り裂けます
この年寄りを、私たちのハルモニと呼んでください
子のない寂しさはあの世に行けば無くなるでしょうが
日本のやつらに生き地獄の目に合わされたことは忘れられないのです
悪いやつら、けもののような日本のやつら
私のからだに　残された爪あとは　深い心の傷だけではありません
私の人生、わたしの一生すべてをみな駄目にした汚い奴ら
きれいな私のからだに糞を塗りつけ
美しい私のからだに精液を浴びせたのです
男なんて何も知らなかった14歳のわたしを
日本のやつらは股ぐらにはさんで精液の捨て場にしたんです
性器の棒くいで私を打ち、殴り、刺し、昏倒させました

（身震いしながら）

私のある友だちは、股を裂かれて死んでいきました

（身震いして）

ある日本の軍人は
拒絶する私の友だちを　その場で
刀で刺し、銃で撃ちました

（身震いして）

ある私の仲間は　朝鮮の言葉を話したからという理由だけで
私たちの前で　のどを裂かれました

（身震いしつつ）

ある日本兵は
身ごもった私の仲間の腹を割き
胎児を取り出して、高く持ち上げ
チョセンジンが死んだ！

（しばし沈黙して）

もし、そこの善男善女のみなさん！
私の青春は　誰が返してくれますか？
私の人生は　誰が返してくれるのですか？
いつでも飢えていた日々が私の一生でした
いつも呻吟していた日々が　私の一生だったのです
いつも　いつも恥辱に震えていた日々が私の人生だったのです
挺身隊、挺身隊という言葉を聞くだけで、胸がどきどきし
日本のやつらのことを考えると悔しさに歯噛みしました

私の天まで届くこの恨みは
日本のやつらの金だけで　解決されるものではありません
日本のやつらの謝罪だけで　解決されるものではありません

この苦しみ、この痛みを誰が分かってくれるだろうか
いっそ　生き地獄に暮らした私の仲間たちをみな探し出し
死んでいたなら　せめて死体だけでも見つけ出して
その亡骸をおぶい、いだいて、背負い上げて
いっしょに生き、いっしょに死ななくては

仲間を探しにいこう　友を探しに行こう
隠れ暮らす　友を　病に伏した友を　見つけ出し
お墓もあばき、バラック小屋もひっくりかえして
激憤する仲間たち　悔しがる　友だちを
皆探しにいこう、みな探しに行こう
ひりひりと痛む　胸で
あの　血の流れる　夕焼けのなかに
友を探しに　友を探しに　いこう

（了）